



# CIF JAPAN

NEWSLETTER No.48

<https://cif-japan.com/>

**Council of International Fellowship Japan**

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂本正路

編集人 坂岡隆司 発行日 2022 年 3 月 15 日

事務局 〒607-8216 TEL 075-574-2800

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

ウクライナがロシア(プーチン)の武力によって踏みにじられています。戦争とは関係ない、子どもや老人をはじめ、武器を持たない無辜の市民が次々と犠牲になっています。家を焼かれ日常を奪われた人々は、故郷を追われ難民となりその数すでに260万人を超え、さらに増え続けています。戦争に反対するロシア市民も弾圧されています。ほんとうに心痛みます。どんな理由であれ、力で他国の主権や自由、いのちや財産を奪い、我がものにしようとする試みは絶対に許されることではありません。今号ではこれに関連した投稿をいくつか頂きました。こうした事態の中で、私たち CIF の、国を超えたつながりは、ますます大切になっていると思います。

## 「ウクライナへ平和を！」

小山哲夫(1977Cleveland)



この会報記事が皆様の目に届くころ、ウクライナ情勢がどうなっているかは想像できません。戦いには夫々の正義があり、事情を知らない私が言及することは難しいことは承知しています。ただいくら考えても強大な軍事力を持つロシアが、プーチンと呼ばれる者が、その力を行使して隣国

ウクライナへ攻め入り、自分の意のままなる国にしようということは決して容認できません。

先日、皆様宛へ、ウクライナの現状を見て、いたたまれず“*No War in Ukraine*”と発信させて頂きました。

今、私にできることは、寄稿すること、YMCA の募金に応えること、報道を見続けること、マクドナルドへの参意として、マックフライド サイズとダブルチーズバーガーを購入することぐらいしかできません。先日のことドライブスルーの外で注文を聞く若いスタッフへ「ロシア全土でマックが侵攻抗議の一時閉店、でもスタッフには給与は出すらしいね。今日は応援です」と言いますと、「その様ですね、でも、私世界の事あんまり解らないので」と。これでいいのだと思いました。「変なお爺さんがロシアのマックの事言っていたよ」とアルバイトお仲間の話題になれば、なおさらです。

熊本市街で今週末(3月12日)「アートフレックス」という、10数組のプロJAZZバンドがあちこちのストリートに出て演奏する恒例イベントがあります。“一寸だけ”親しい実行委員長格のサクソプレーヤーに「ウクライナに平和」などの緊急テーマを掲げてはどうでしょうか」とメールしました。すると「このイベントの約束で政治やイデオロギーに関する発言はしないようになっている。芸術の器の範囲で」との返事でした。一応わたしも「何もしないのも政治的な態度だし、平和は人としての叫びでは」と返信しました。芸術の器ってなに?ピカソのゲルニカは芸術じゃないの?と突っ込みたくなりましたが、別の機会に。少なくとも、彼とこの様な対話が出来たことに意味はあったと彼にも伝えました。明後日の土曜日、HPで調べた彼のテナーサクソジャズ演奏時刻に街へ出かけ、「イヤー先日は!」と“一寸”声を掛けるつもりです。

来週の3月17日は、シニアの皆さんを集め、市内のルーテル教会を会場に毎月開催の歌声広場。NHK朝ドラの準テーマ曲“*On the Sunnyside of the Street*”やベニー・グッドマンの*Memories of You*などを歌う予定です。また、ジョンレノンの*Imagine*をみんなで歌い、平和・ウクライナ的话题を集まった皆さんへ“一寸”しようかなとも思っています。ウクライナの人々、戦う両軍の兵士たちを覚え・思い、心を寄せるだけしかできません。(2022年3月10日)

# 平和な社会を築いていくために

藤本聿子（1973コロンバス）

「戦争ほど愚かな行為はない」と誰もが、気づきながらも争いや戦争が、どこかで引き起こされている世界である。今まさにそんな現実が、ウクライナとロシアの間に起きているそんな時、CIP プログラム(1973 年)で、最初に訪れた国連総会が開催される本会議場に、入った時の心の高揚感が、年を経ても忘れられない。というのも参加国のネームプレートが、平和を希求する象徴のように感じられたからである。JAPAN の国名を見つけた時には、日本が、確かに世界の一員として再び復帰したのであることが、感じられたのである。それは、日本も戦争を引き起こし、多くの人命を奪い隣人を苦しめた歴史を持つ国だからである。真に平和を願い維持する日本であって欲しいと願った私だった。そのあと私は、コロンバス(オハイオ州)に移動し研修が始まった。州立大学で各参加国の資料を基に、議論が続いた。五大大陸のうち、オセアニアからの参加者を除く四大大陸からのメンバーだった。社会福祉を基盤にしたこれからの世界平和と社会福祉の役割が議論されたのであるが、なかなか議論がかみ合わないのだった。そこには、それぞれの国の歴史、教育、文化等々多くのものが背景にあり、無視できないことに、気づかされたのであった。正論だからと、言われても受け入れがたいこともあるのではないかと思った。

今回のウクライナとロシアについても言えるのではないだろうか。両国の歴史を知ったうえで、即時停戦又は、休戦合意の話し合いが必要と思えた。こんな時フツと PKO 国連軍が、思い出される。国連軍 PKO の活用はできないのだろうか。

ところでコロンバスで、最も衝撃だったのは、西ドイツ{1973 年当時}からの参加者が、途中研修をボイコットし、帰国した事だった。本人曰く、(ここでは、何も学ぶことがない、自国のほうが進歩している)と、本人が帰国して数日後、これについて数々批判もしたが、私は、その自己主張する勇気と、意志の強さに感心したのだった。日本の職場での私は、公の場では、どうも一歩引いたところがあり議論をかわしていたのであった。それからは、他人に左右されず、自身の意見が持てるよう努力し、発言の機会を逃さないように、努力したのだが、日本の気候風土の中では、そう簡単ではなかったような気がした。しかしその後、多くの異文化に触れ色々な国の人々と、触れ合う中で、役に立っていることを実感するのである。硬直化した社会に進歩は、望めない。自分の頭で考え、自分に責任を持ち、発言し、

行動できる人でありたい。その際、人々の人権を大切に、時間をかけ議論し平和な社会を築いていく努力を惜しまないでほしい。そのことが、日本の最終的には、世界における地位と、繁栄を、もたらすことにつながると、信じているのである。

## コロナ禍雑感

—この2年間で経験したこと、感じたこと—

加納 光子(1977 コロンバス)

コロナ禍が2年以上続いている。こんな時代が来るとは世界で誰もが予想しなかったであろう。幸いといえると思うが日本ではマスクすることが風邪などの時の生活習慣として普通に浸透していた。そして、愛情表現としての挨拶としてのハグの習慣はなかった。そして、土足で室内に入らない生活スタイルがあった。これらがなければもっとひどい感染状況になっていたのではないかと素人考えで思っている。

老若男女を問わずホームステイというひきこもりの生活による心身両面の健康被害、社会経済の停滞、医療・保健・福祉従事者の過酷な労働、子どもたちの登校できないことによる(如何にオンラインで補っているとはいえ、友人との交流とか対面でしか得られないことの喪失、実際の学習面での遅れという)学習被害、とくに大学生でコロナ禍中に入学し進級している方々は、社会人としての直前の準備段階でもあるので、友人や社会との切断は将来に対する弱点になるという学習面だけに留まらない不利益、等々は多くのところで語られている。故に、ここではわたくしの身の回りで起き、感じたことを述べてみたい。

喜寿を過ぎたが、わたくしは今なお非常勤講師として、後進の方々に社会福祉・精神保健福祉・ソーシャルワークをお伝えする機会を与えていただいている。2年前の今頃は授業がオンライン化される兆しがあつて戦々恐々としていた。そして新学期が始まって予想通りにオンラインによる授業が始まった。パワーポイントでの授業は数年前から始めていたので教材の素材づくりに関してはさして困難はなかったが、大学からほとんど毎日のようにメールがきて、オンデマンドとか、ライブとか、ビデオ配信とか、ハイブリッドとか聞き覚えのない言葉がどっと押し寄せてきて、オンライン授業に関する細やかな指示が次々とひっきりなしに伝達された。数回ズームによる機器操作の講習会もあった。

また、この頃にはビデオ授業の仕方をユーチューブで配信してくださっている親切な方々がいてその方々の動画を何回も見たりして、オンラインによる授業の仕

方を理解しようとした。ユーチューブやフェイスブックを使い始めたのもこの頃である。もちろんズームやチームズにもこの時にはじめて触れた。友人がズームで撮ったらしい一回分の彼女のビデオ授業を配信してくれたのも大変参考になった。教員同士の機器の操作についての情報交換も役に立った。

このようにして、オンデマンド(ビデオを大学の教育支援ツールにアップしておいて受講者が必要な時に視聴する)やライブ(ある一定の時間にズームなどを使って実際に、同時進行でオンライン授業を共有する)での授業が何とかできるレベルまでは達することができた。その結果、ビデオ作成の時、それまで必要だとは思いつつも手つかずであった自分の講義を聴き返し、話し方の癖や発音の不明瞭なところも気づくこともできた。吹き込みで失敗した時や言葉のつながりを知るために望むと望まざるとにかかわらず聴き返す必要が出てくるからである。これはビデオを作成して授業しなければならぬという、この事態にならなければ試みなかったことである。

また、2年目には秋学期の始まる前日にパソコンが壊れて、準備していた授業用も含めて、すべてパソコンにあったデータが消失してしまうという災難に見舞われた。オンラインになってから酷使したせいもあったのかとこれも素人考えで思った。昨夜までは動いていたパソコンが、朝、起ち上がらなくなっていた。作業が終わったときにデータをUSBに保管せずに、眠くなったのでそのままに放置して寝てしまった自分の怠慢を悔やんだが、後の祭りであった。その学期は3科目担当していた。そのうち2科目は前年にも担当していたので、以前にUSBに保管していたデータを参考にできたが、1科目は数年ぶりに担当することになった科目で、データのすべてを新しく作り直していた。故にかなりの痛手であった。すぐに準備しなければと思ったが、携帯用に持っていたわたくしのノートパソコンは機能が低く動画を作成できないものだった。仕方なく、真っ青、冷や汗の状態、一駅向こうに住む次男の留守宅に侵入して(もちろん、了解は得たが)、次男のパソコンを使って何とか翌日の授業の準備をした。フェイスブックでこのことをぼやいていたら、知り合いがワンドライブに保管すれば良いよと教えてくれた。ここで初めてワンドライブの存在を知った。いずれはそのことを知ったかもしれないが、このように、コロナ禍が発端になって、今の時点で知りえた便利なこともあった。

コロナ禍が始まって無我夢中のうちに、何とか1年目が過ぎた。2年目になればコロナ禍が終わると楽観していれば、何のことはない新型が登場した。昨年の授業は春学期の1回目だけが教室で実施され、その後は秋学期の数回を除いてすべてズームによるライブ

授業となった。

仕事面では以上の経験をしたが、私的な面で感じたこと以下のことである。

社会では、老人会の集いをズームで行ったということもあり、学齢期の子ども達を含めて誰もがITに強くなったように思われているようである。しかし、わたくしのような高齢者でもどうしても必要に迫られた人は別として、一人暮らしの高齢者で周りに若者がいない方は、ズーム会議や講演会に入るだけでも大変なようであった。業者に来てもらって、あるいは業者のところに行って、会議や講習会に入れるように設定してもらえば良いと誰しも簡単に思われると思うが、一人暮らしの家に良く知らない業者に入ってもらうのは何となく億劫であるし、逆に業者のところに行っても一度で理解できるとは限らない。そんな簡単なことが、、、と思うことが高齢者の場合は困難なこととして起こるのである。わたくしも実感するところであるが、高齢者にとって日頃から慣れていないことはとりわけ取り掛かりにくい。

しかし、今後は高齢者も情報弱者にならないためにはITをある程度は操作できる必要があるように感じる。コロナ禍が終わればデイケアなどで、デイケアに行っていない高齢者にも開放して、IT講習会を開くというようなことはできないだろうか。

後日談であるが、ズームに入りこなかった先ほどの高齢者の方はその後、スムーズにズーム会議や講演会に入れるようになられたという。誰かが教えてさしあげたか、ご自分で会得されたかは定かでないが、80歳代半ばの方である。(2022年3月1日)

## コロナ禍にあつて

梶村慎吾 (1996 Cleveland)

I 3年目に入ったコロナ禍の下で、ワクチン接種・マスクの着用等、感染防止のための様々な不自由を背負った日々を人々は過ごしています。その間、我々CIFジャパンの活動は外国のCIFへの研修生の派遣および外国のCIFからの研修生の受け入れ共、自由には行いえていません。一日も早く、コロナウイルスを恐れなくてよい日が来てほしいものです。その中で藤原さんが昨年CIFフィンランド主催のズームを利用した研修に参加されたことは大きな励みとなりました。

人々は不自由に耐えながら日々を過ごしていますが、コロナ禍を含む種々のパンデミック(世界的流行病)をこれまでの歴史において人類は経験し、乗り越えてきたと考えられます。今回のパンデミックも望むと望まざるとにかかわらず乗り越えていかなければなりません。

私たちは人類社会の一員として、パンデミックに対する認識を深め、それに打ち勝たねばならない立場にあります。

2 パンデミックを引き起こす病気の源は、歴史的にはコロナ以外にペスト・天然痘・インフルエンザ・マラリア・エイズ等々がありました。その中の一部は医学の発達により人類が恐れなくてよいものになりました。

日本では天平時代に天然痘が流行し、それからの治癒を祈願して当時の人々の手により奈良の大仏が西暦749年に完成したと伝えられています。

今回のコロナウイルスの蔓延により我々人類が太古の昔から苦しめられてきたパンデミックという大きな厄災に突然直面し、現在それと苦闘している最中にあります。過去に人類が直面した試練を、現在の人類もまた立派に克服しつつある道の途上にあるのだと感じているところです。

## CIF INTERNATIONAL の動き

2022年 CIF 国際交換研修(IPEP)について

本年1月22日、IPEP(International Professional Exchange Program)担当者会議がオンラインで開催され、準備状況と新しい課題について報告と協議がおこなわれた。

**各国の準備状況と応募者数** 本年は、4月～5月に3か国が対面またはオンラインで、夏以降に8か国が対面での研修を予定している。オンライン研修が可能になったとは言え、誰もが交流には対面研修が望ましいと考えていることが明らかになった。研修を実施しないと決めたのは日本を含め6か国と1団体(CIF/USA)、2か国が検討中と表明した。応募者数には各国間で顕著な差がみられた。すなわち、参加費無料の国(4か国)への応募がそれぞれ10数人ずつあったのに対し、有料の国への応募は1人～2人と極端に少なかった。

**新しい課題** コロナ禍を経て新しく出てきた課題は多々ある。参加者の入国にともなうワクチン接種や各種検査など募集の際の参加条件をどうするか、受け入れ側のメンバーや実習先施設職員の体制をどう整えるか、ホームステイはどうか、感染時の対応・隔離要請への対応など重大な局面が発生した場合どう行動するかなどなど。また、経費高騰も新たな課題となっている。今までにはなかった出費や疾病保険料、航空運賃の高騰など費用負担の増大が研修参加意欲を低下させているという心配の声があがった。研修運営担当者からは、「新型コロナウイルス関連の注意事項」をまとめ、IPEP 運営マニュアルに追加してほしいと

いう要望も出された。

**今後の対応** 各国支部は以下の3点を共通認識とし、それぞれに試行錯誤を重ねつつ IPEP を実施することを申し合わせた。

1. 課題と経験を共有する。(→孤立しない。)
2. IPEP 参加者が将来 CIF 発展の力となる。
3. 新しい可能性と代替策に積極的に挑戦する。(→なんでもやってみる。)

## CIF International 2022 年会議日程

- 3月18日～19日 CIF 役員会議(スイス)
- 4月30日 CIF 各国代表者会議(オンライン)
- 6月 IPEP 担当者会議(オンライン)
- 10月21日～23日 CIF 各国代表者会議(イスラエル)

(浅野純江記)

## 2022年度総会のご案内

日時：2022年5月21日(土) 13:30～

会場：東京近辺及びオンライン併用を予定  
完全オンラインの可能性もあります。

- \* 当日は、総会に先立って理事会が行われます。
- \* 開催案内、議案書は、後日お送りします。

### << 2022年度会費納入ご協力のお願ひ >>

新年度の会費の納入をお願いいたします。また、昨年度の会費が未納の会員各位には併せて納入をお願いいたします。(年会費 3000円)

郵便振替口座 番号 00270-4-54121

加入者名 CIF ジャパン

銀行口座 三井住友銀行 八王子支店

(店番号 843) (普) 7815136

口座名義 CIF ジャパン出納責任者梶村慎吾

### 《編集後記》

ウクライナにおけるロシア(プーチン)の世界史的な暴挙に、怒りと悲しみを覚えます。まさか核は使わないだろうと思いたいですが、心配です。コロナも含め、現代の危機は、もう国や地域の枠を超えています。国際的な連帯が必要です。かつて CIF 研修でニューヨークの国連の議場に、各国参加者が集まった時のことを思い出します。ソーシャルワーカーたちの国際的な草の根の交流には、やはり大きな力があるのだとあらためて思います。(TS)